

躍動力フェ (阪神南地域) 議事要旨

1 概 要

- (1) 日 時 : 令和7年12月23日 (火) 13:40~16:40
- (2) 場 所 : 尼崎リサーチ・インキュベーションセンター1階多目的ホール
(尼崎市道意町7丁目1番3)
- (3) 参加者 : 斎藤知事、阪神南地域(尼崎市、西宮市、芦屋市)に在住・在勤等しており、ツーリズム、環境保全活動、青少年育成等、各方面で活躍している19名
- (4) テーマ : “住みたい” “働きたい” “訪ねたい” 未来に繋がる 魅力ある阪神南
- (5) 内 容 : グループ別ワークショップ (A~Dグループ)
知事挨拶
意見発表・質疑応答 (A~Dグループ)
知事総括コメント

2 意見発表の内容

A 中小企業の人材確保

発表者 : 山下 紗矢佳 (進行役)

現状と課題 :

- 阪神南地域には多くの中小企業が立地し、地域としての魅力も高いが、企業や仕事内容に関する情報が学生や学校側に十分に届いておらず、認知度が低い。
- 「ものづくりは大変」といった労働環境に対するネガティブな固定観念が業界全体に根強く残っている。
- 若手社員へのフォローや指導に関するノウハウが不足しており、十分な指導体制が整っていないため、人材の定着につながりにくい。

課題解決に向けて :

- 認知度不足や固定観念を払拭するため、楽しさを入口としたイベントを開催し、ものづくりに関心がない層にも業界の魅力を伝える。例えば、祭り等のイベントに仕事(ものづくり)の要素を取り入れるなど、気軽に参加できる工夫を行う。
- 阪神南地域の交通の利便性や立地の良さを生かし、姉妹都市などとの地域連携による合同採用説明会を開催することで、広域からの人材確保を図る。
- 阪神南地域に集積する多様な企業や高い技術力を生かし、キャリア教育に積極的に参画する。企業の経営者や社員が学校に出向き、生徒に仕事の魅力や意義を直接伝えることで、学校側の負担軽減にもつなげる。

質疑 :

- 中小企業の魅力として、具体的にどのような意見が出たか。

応答 :

- 阪神間には技術力の高い企業が多く、「作れないものはない」と言われるほどの実力を有している。一方で、その認知度は低く、企業自身も自社の全国的な立ち位置や技術力を十分に把握できていないケースもある。自社の強みを再認識し、若い世代にその魅力を分かりやすく発信することで、中小企業への就職促進につなげていくことが重要。

質疑 :

- 近年は終身雇用よりも、複数の技術や知識を身につけるキャリアアップ型が一般的になってきている。一方で、製造業は長期的な経験の積み重ねを前提としており、相容れない面もあると感じる。企業間で協力し、会社の枠を超えて技術を身につけるような機会を創出することは可能か。

応答 :

- 当社では、ロボットを導入しようとする企業や、ロボット業界に参入しようとするコンサルや商社などの社員を預かって教育するなどの取組を実施している。昨今のAIなどの技術の発展により、ホワイトカラーの仕事の将来に不安を抱く若者が増えている現状もあり、専門的な技術を身につけるためにも、企業間交流の可能性も模索していくことができればと考えている。

B ツーリズムによる魅力発信

発表者：海老 良平（進行役）

現状と課題 :

- 阪神間には、酒、スイーツ、建築などの「阪神間モダニズム」と呼ばれる多様な観光資源が存在するものの、ブランドイメージが曖昧で、大阪城や姫路城のような近世以前からのシンボルがないことから、情報発信する際の統一感がない。
- 阪神南地域では各市の独自性が強く、それぞれが個別にイベントや情報発信を行っているため、地域全体としての魅力発信が分散してしまっている。
- 阪神間の地域資源の一つとして、魅力ある個人商店が数多く存在するが、例えば、土日のイベントに出店する場合、店を閉めなければならない一方で、イベントでは十分な利益が見込めないため、出店が困難という課題がある。

課題解決に向けて :

- 伝統とモダニズムを融合した観光コンテンツを企画し、若者も楽しめる要素を取り入れる。
- 地域ごとにショートストーリーを作成し、キーパーソンが文化を広く発信する仕組みを構築する。個人商店も参画できる「顔が見える観光」を推進し、イベント開催のほか、街歩きプランやショートストーリーの作成を通じて、横のつながりや新たな連携を構築する。まず日本人に知ってもらうことが重要。
- 食文化など嗅覚をはじめとする五感に訴える観光を展開する。唯一無二のモダニズム建築を活用し、異分野とのコラボレーションによって新たな魅力を創出する。

質疑：

- 地域のユニークな人材をどのように発掘していくとよいか。また、個人商店とはどのように連携していくべきよいか。

応答：

- 人材発掘やショートストーリーの制作には産官学の連携が不可欠であり、地域文化の調査・研究を担う「学」がつなぎ役となることが重要。また、個人商店との連携は、長期的な信頼関係の構築が前提となり、そこから横のつながりや新たな連携が生まれるものと考える。

C 水と緑のまちづくり

発表者：岡田 博行（進行役）

現状と課題：

- 尼崎の森中央緑地については、地域住民や企業、NPO団体などが連携して生物多様性の森づくりを進めているが、担い手の偏りや高齢化が課題となっている。
- 若者に響くような取組が十分でないことや、尼崎の森中央緑地へのアクセスのしにくさから、若年層を含む多様な人材の参画が不足している。

課題解決に向けて：

- InstagramやTikTokなど若者に届きやすい媒体を活用したPRを強化するとともに、紙媒体も併用し、世代別に最適な情報発信を行う。
- イベントや協議会に学生を積極的に参画させ、運営を担ってもらうなど若年層が主体的に森づくりを考える機会を創出する。森づくりに限らず、地域全体に波及効果のある仕組みづくりが望ましい。

質疑：

- こうしたイベントに小・中学生を巻き込むことは可能か。

応答：

- 例えば、芦屋市では、小・中学生、高校生、大学生、民間企業、行政が一体となってまちづくりプロジェクトを進めている事例がある。高校生・大学生に限らず、小・中学生も参画できるイベントの実施が望ましい。

D 青少年の健全育成

発表者：東 朋子（進行役）

現状と課題：

- 共働き世帯の増加や兄弟姉妹の減少により、家庭や学校の中で居場所を見いだせない子どもが増えている。
- 公園でのボール遊びの制限や、ダンス練習の場がないなど居場所が限られている。中学校の部活動の地域移行に伴い、子どもの居場所や地域で活動できる場所が不足する。

- ユースセンターは存在するものの、生活活動線から外れていたり、気軽に過ごせる雰囲気がなかつたりと、全ての子どもの受け皿となりきれていない。

課題解決に向けて :

- 子どもの生活活動線上での居場所づくりを重視し、学校の空きスペースを活用して、中学生や大学生が無料で活動できる場を創出する。
- 例えば、大学の非公認サークルは活動場所や費用面で課題を抱えており、そうした大学生が学校の空きスペースを活用できる仕組みを整える。中学生にとっては大学生が身近なロールモデルとなり、大学生にとっても地域との関わりが深まることで、地域への愛着や誇りの醸成にもつながるのではないか。
- 学校開放に当たっては、管理者や見守り体制を整備し、地域住民が協力しながらも、最終的な責任は行政が担う体制が望ましい。

質疑 :

- 学校開放に際し、鍵の管理や見守りの負担を減らす方法はあるか。また、学校に行きづらい子どもが、開放された学校を利用するハードルをどう下げるか。

応答 :

- 学校開放の仕組み自体は既に存在しており、地域に鍵の管理役がいることから、現状の仕組みで対応可能と考えられる。また、学校に行けない、教室には入れないが、放課後に友達と遊ぶことはできるという子どもにとって、開放された学校であれば誘い合って来られる可能性がある。

3 知事総括コメント

- 大変興味深く拝聴した。いただいた意見を真摯に受け止め、今後の県政運営に生かしていきたい。
- 中小企業の人材確保においては、企業の技術力や立ち位置などの「見える化」が重要である。本県でも、ひょうご・こうべ女性活躍推進企業認定制度や、ひょうご産業SDGs認証事業を進めており、こうした視点を今後も大切にしていく。
- ツーリズムによる魅力発信については、阪神間モダニズムをはじめとする多様な観光資源をどのように盛り上げていくか、また個人商店の参画をどのように促すかという点が大変興味深かった。
- 水と緑のまちづくりについて、尼崎の森中央緑地は、県が長年にわたり育んできた重要な公園緑地である。その魅力をSNSなどで積極的に発信するとともに、交通アクセスの課題や、若年層にも利用を広げていくことをしっかりと考えていく必要がある。
- 青少年の健全育成においては、子どもの居場所づくりが重要であることを改めて認識した。県の不登校支援プロジェクトも、まさに居場所づくりがポイント。居場所を安全に運営するための体制や管理の在り方については、今後もしっかりと検討・研究していく必要がある。